

◆寄贈書案内

● 渋川満先生（元法科大学院法務研究科長）より



書名：裁判官の理想像
著者：渋川 満
発行：2021年8月（第三刷）
日本評論社
初版（2016年2月）から若干の加筆があります。

● 新谷由里子先生（教育学部教授）より



書名：少子化と女性のライフコース
発行：2021年8月 原書房
新谷先生は、佐藤龍三郎先生と共著で「第4章 女性のライフコース戦略と家族・仕事・社会のゆくえ」を執筆されています。

● 仁平晶文先生（経営学部非常勤講師）より



書名：経営組織論の基礎：要点整理
発行：2021年9月 五紘舎
仁平先生は、「第2章 組織論の基本理論」を執筆されています。

● 藤浪英也先生（経営学部准教授）より



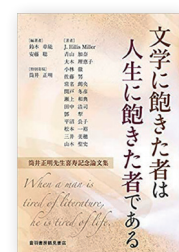
書名：入門簿記会計
著者：藤浪英也
発行：2020年12月 同友館
簿記を学ぶ大学生向けのテキストです。

● 福宿光一先生（元経営学部教授）より



書名：論集日本の木炭生産地域：100年の足跡
著者：福宿光一
発行：2021年12月 農林統計協会
日本各地の木炭生産の盛衰を、時代順に地域ごとにまとめた資料です。

● 関戸冬彦先生（法学部教授）より



書名：文学に飽きた者は人生に飽きた者である
発行：2020年3月 音羽書房鶴見書店
関戸先生は、「英語の教室でフィッツジェラルドの短編と長編を用いた四技能育成事例」を執筆されています。

つぶやき

新型コロナ禍以前に、コロナと聞いて思い浮かべるのは太陽だった。太陽というマキシマムな存在が、ウイルスというミニマムにとってかわられるとは、いったい誰が想像しただろう。そういえば本学図書館でも貸し出しが増えた小説『ペスト』であるが、作者のカミュには『異邦人』という不条理をテーマにした出世作があり、殺人罪で裁判にかけられた主人公が、その動機を「太陽が眩しかったから」と語る。コロナウイルスと太陽をこじつけても仕方がないが、本の世界では想像できないことが当たり前になるものだ。

2022(令和4年)4月1日 発行
編集 図書館だより編集委員会
発行 白鷗大学総合図書館
〒323-8586 栃木県小山市駅東通り2-2-2
ホームページ <https://library.hakuoh.jp>
印刷 第一印刷株式会社

学校図書室（図書館）の思い出

名誉教授

高橋 紀 夫



「図書室（図書館）」も、設置目的や機能によってコンセプトが異なるのは当然です。それでは、小学校高学年・中学・高校時代の1960年代（今から半世紀以上も前）に遡ってみます。小学生・中学生時代には、図書係（委員）として活動したとき以外には「図書室」を利用することは少なく、事務作業（貸出・返却、図書・目録カードの整理、虫干し［わかりますか？］の手伝いなど）をこなしていた記憶があります。ただ、そんななかでも、小学生のときには図鑑で調べたり、外国文学の児童書を読んだり、中学生のときには推理小説や歴史書を読んだりしていました。「百科事典」も多量の詳細な情報が載っているので、感心して調べていました。もちろん、当時はパソコンやスマホなどない時代ですから、単純にすごいなと思っていました。

ところが高校生になると、あらためて学校には「図書室」なるものが存在することを認識し、そこで少なからず時間を過ごすようになり、図書を借りて読むことも多くなりました（なぜか高校3年次にはその頻度が高くなりました）。好きな作家の小説や入門的な専門書が主でしたが、月刊誌の評論文も盛んに読んでいました。

これらの時代を通じて、たぶん図書室の隣に

あった（付属していた）「作業室」での文集・学級新聞・グループ発表レジュメ等の制作作業が思い出されます。謄写版による孔版印刷、すなわち型紙を枠に張り、上からインキを押し出して印刷する方法で、版そのものに孔（あな）があいているものです。謄写版は蠟（ろう）紙を金属製やすりの上に置き、文字・図・絵等を鉄筆で手書きすると、その部分だけ蠟のはがれる方法で、ローラーでインキをつけると、蠟のはがれた部分はインキが通過して紙（当時はわら半紙）に移るのです（簡単に言えば、蠟引きの原紙に鉄筆で手書きして細かい孔をあけ、そこから印刷インキをにじみ出させて刷るのです）。ローラー式（平版式）謄写版で、手作業で1枚1枚を刷っていました。コピー機はもちろん、電動輪転式謄写機はおろか、手動輪転式謄写機もなかったですから……。俗に「ガリ（がり）版刷り」（今や死語？）と言われるものです（この呼び方のいわれに興味がありますか？）。

大学生になると「図書館」の利用の仕方も変容しました。「閉架図書」が中心で、「開架図書」はかなり数に限りがあったため、持ち込み書籍や貸出禁止の雑誌・文献等を読んでいました。それまでの乱読・速読から熟読・精読に変わり、借りる

書籍も専門書となりました。「図書館」は勉強・学習の場となった気がします。

今の私にとって、学内で一番心穏やかに豊かな充実した時間を過ごすことができる空間は、何といても「図書館」です。幸い、特に本学の「本館」はキャンパスのどこからでも外に出ることなく行くことのできる好立地な場所にあり、多目的スペースもあります。また、すべて「開架図書」であり、読む書籍・文献に「はずれ(?)」はあ

りません。学生の皆さん、「図書館」は「知性・教養の宝庫」ですから、各自それぞれのコンセプトで創意工夫して利用してみてください。ただし、世は「デジタル社会」に向け動き出しており、書籍の電子化も進められているので、近い将来、「図書館」も、「電子（バーチャル）図書館」に変貌し、「現実（リアル）図書館」はなくなってしまいかもしれませんが……。

ヒマつぶし計画進行中

名誉教授

山城 崇 夫

定年退職を前にちょっと気掛かりなことがあります。何をしてヒマをつぶそうか。「何をいまさら。前からヒマしてますよね。」のツッコミに、しょげてしまいそうな私ですが、気を取り直して、定年前から準備をするべきとのハウツー本の教えを実践した顛末(途中経過)をお話ししましょう。極意は、「定年後では遅すぎる」です。今から始める残り少ない人生に、これまでやってきたかったけれども都合により断念したことに改めてトライしようと決心しました。

初めに思い立ったのは、高校生の頃の夢、ジャズ演奏家です。しかし、トランペットのマイルス・デイヴィスを気取るには、だいいち奏力がありませんし、練習場所も確保できません。電気消音装置一式を買ったけれど音漏れを防ぐことはできません。そこで、手元にあるギターで4畳半ソングを歌うことに方針転換を図り、早速、加藤登紀子（唄）の「死んだ男の残したものは」に取り組みました。その矢先、集合住宅で身に覚えのない騒音トラブルが発生。小心者なので現在ギターも歌も自粛中です。

もうひとつ。10代の中頃、詩人になるという妄想がありました。中原中也や宮沢賢治、金子光晴や田村隆一に夢中になり、詩人の真似事を始めました。しかし、学校の校友会誌に掲載された詩は、同級生から冷酷で残酷な批評を受け、あえなく吟遊詩人の夢を封印。それでも、詩作は無理でも訳詞ならと思い立ち、早速、大学図書館でエミリー・ディキンソンを借り出しました。彼女の伝記映画「静かなる情熱」の感動の余韻が今なお続いていたからです。岩波文庫や海外詩文庫の訳を参考に、私流の名（迷）訳をと意気込んだのは最初だけ。たちまち英語の壁に跳ね返され、汗水垂らして辞書をめくるのも御免なので、「静かなる情熱」を冷凍したところです。

ということで、一足先に隠居した友人たち同様、気まま勝手な散歩の達人を目指そうと思います。ところが正月早々、すってんころりと転倒し、散歩も危険がいっぱい。どうやらヒマつぶし計画は落着しないようです。

一冊の書物に呼ばれた日

教育学部教授

有 馬 知江美

疫病が蔓延する前の話である。東京・池袋の大通りを歩いていると、ふとその古書店に立ち寄りたくなった。それまで何度も店の前を通り過ぎていたのだが、入店は初めてである。

夕方の店内は意外にも活気があった。人々が何かに掻き立てられているような不思議な活気である。レジのあたりを見ると手書きの貼り紙があった。なんでも今日が店の最終日。閉店セールの日であり、あと二、三時間でこの店の長い歴史が閉じられるのである。

店内を一回りすると、希少本が廉価で売られている。通常だったら倍以上の価格だろうと思いながら何冊か手に取ってみる。まさか最後にセール価格で売られるとは思っていなかったであろう数々の名著が少々気の毒であった。

聞けばこの店には二階もあるという。人々の活気に押され、自然と足が階上に向かう。しかし二階は思ったよりも静かで、数名のお客がそれぞれに古書を吟味していた。思想関係や芸術関係の品揃えである。もっと早く来店すべきだったと後悔しながらゆっくりと一周する。

その時である。日に焼けて相当色あせた多くの書物が並んでいる一角に目がとまった。そこに、少々遠慮がちにはあるが、随分と前から静かに待っていましたといったような佇まいの**一冊**があった。そして、私はその書物と確かに**目が合った**のである。驚くべきことに、それは私がかねてより入手したいと思っていた『山本鼎の手紙』という書物だった。

予想もしなかった偶然の出会いに私は動揺しつつ、古びたその書を棚から丁寧に引き出した。明治期から昭和20年代に至るまでの山本鼎（明治15

年－昭和21年）の書簡集である（山越脩蔵編 上田市教育委員会刊 昭和46年）。そこには、留学先のフランスから信州の両親を案ずる芸術家であり、大正期の自由画教育運動や農民美術運動の提唱者として諸活動の意義を支援者に説く情熱家であり、他方では、写生旅行の合間を縫って、幼い息子宛の葉書にて「蛸の足は何本ありますか。」とか「石一貫目と、おとうふ一貫目と、どっちが重いですか。」という問題を出題する父親でもあった山本鼎による生きた言葉が綴られている。

さて、私はといえ、早く会計をすませればいいものの、閉店の音楽を耳にするまでその場で一時間以上もこの書を読み耽ることとなった。この書との偶然の出会いの不思議さを、古書店の店じまいという独特の時空間で味わいたかったのかもしれない。

一冊の書物に呼ばれたあの日がとてつもなく懐かしい。混迷する時代の中で、この書は私の農民美術研究を今後も見守ってくれるだろう。



農民美術「こっぱ人形」

筆者作

